菅原道真漢詩文集成稿

――『和漢朗詠集』――

佐藤信一

はじめに

菅原道真の漢詩文は、自選である『菅家文草』、『菅家後集』に纏められている。ただ、道真の詩文はそれ以外の漢詩文集にも多く引用されている。それらにどのようなものがあるのかを確認し、併せて現在作成中の『文草』、『後集』の校本（和漢比較文学会編『校訂・訓読　菅家文草（仮題）』）の一助、と言おうか、手控えにしたいと思う。道真作の漢詩文を収める漢詩文集には『文草』、『後集』を除いて八集が指摘されている（『平安朝漢文学総合索引』〈昭和62年6月、平安朝漢文学研究会編、吉川弘文館刊〉に拠る）が、今回は『和漢朗詠集』を取り上げる。また、本来なら、これらには索引も付すべきであるが、索引（語彙索引・事項索引等）に関しては他日を期すことにする。

凡例

一、底本には、以下のテキストを用いた。

『平安―粘装本和漢朗詠集』巻上・巻下（日本名蹟叢刊、二玄社、昭和58年1月〈巻上〉、昭和58年2月〈巻下〉）

二、『和漢朗詠集』での巻、部立て、詩番号、及び『菅家文草』、『菅家後集』他における巻、詩番号、序である場合は〈序〉という注記をカッコに入れて、示した。なお詩番号は現在通行するものに従った。

三、本文については、返り点のみ施した。

四、割り注は、＜ ＞で括って示した。なお、全体の書式を整えるために、割り注以外の縮小文字は、原則として本文と同じポイントで示した。

五、巻上「秋、雁附歸雁」三二一番は底本では道真の作とするが、島田忠臣の作の誤りなので除外した。

六、(17) 巻上「秋、雁附歸雁」三二二番は底本で逸している。国会図書館蔵本に拠った。

(01) 倚二松樹一以摩レ腰、習二風霜之難一レ犯也。和二菜羹一而啜レ口、期二氣味之克調一也。　菅

（上・春・子日・二九、『菅家文草』巻六・四三一〈序〉）

(02) 野中毛レ菜、世事推二之蕙心一。鑪下和レ羹、俗人屬二之寅

指一。

（上・春・若菜・三四、『菅家文草』巻五・三六五〈序〉）　菅

(03) 春之暮月、々之三朝、天醉二于花一、桃李盛也、我后一日之澤、万機之餘、曲水雖レ遥、遺塵雖レ絶、書二巳字一而知二地勢一、思二魏文一以翫二風流一、蓋志之所レ之、謹上二小序一。　菅

（上・春・三月三日付桃・三九、『菅家文草』巻五・三四二〈序〉）

(04) 煙霞遠近應二同戸一、桃李淺深似二勸盃一。　菅

（上・春・三月三日付桃・四〇、『菅家文草』巻五・三四二）

(05) 低レ翅沙鷗潮落曉、亂レ絲野馬草深春。　菅

（上・春・暮春・四六、『菅家文草』巻三・二二二）

(06) 送レ春不レ用レ動二舟車一、唯別殘鶯與二落花一。　菅

（上・春・三月盡・五三、『菅家文草』巻五・三九一）

(07) 若使二韶光知二我意一、今霄旅宿在二詩家一。　同上

（上・春・三月盡・五四、『菅家文草』巻五・三九一）

(08) 新路如今穿二宿雪一、舊宿爲レ後屬二春雲一。　菅

（上・春・鶯・七〇、『菅家文草』巻六・四五三）

(09) 鑽レ沙草只三分許、跨レ樹霞纔半段餘。　菅

（上・春・霞・七六、『菅家文草』巻六・四四五）

(10) 生衣欲下待二家人一著上、宿釀當下招二邑老一酣上。　〈譜州作　菅〉

（上・夏・更衣・一四五、『菅家文草』巻四・二五一）

(11) 有レ時當レ戸危レ身立、無レ意故園任レ脚行。　〈艾人　菅〉

（上・夏・端午・一五六、『菅家文草』巻四・二九三）

(12) 臥見二新圖臨水障一、行吟二古集納涼詩一。　菅

（上・夏・納涼・一六三、『菅家文草』巻二・一二二）

(13) 今年異レ例腸先斷、不二是蟬悲一客意悲。　菅

（上・夏・蟬・一九五、『菅家文草』巻四・二五三）

(14) 露應二別淚一珠空落、雲是殘粧鬟未レ成。　菅

（上・秋・七夕・二一四、『菅家文草』巻三・三四六）

(15) 曉露鹿鳴花始發、百般攀折一時情。

（上・秋・萩・二八二、『新撰万葉集』巻上・八六）

(16) 曾非二種處思二元亮一、爲二是花時供二世尊一。　菅

（上・秋・前栽・二九八、『菅家後集』四九七）

(17) 碧玉裝箏斜立柱、青苔色紙數行書。　〈天淨識賓　菅〉

（上・秋・雁附歸雁・三二二、『菅家文草』巻五・三七九）

(18) 床上卷收青竹簟、匣中開出白綿衣。　菅
（上・冬・初冬・三五四、『菅家文草』巻四・二七二）

(19) 君子夜深音不レ警、老翁年晚鬢相驚。　菅
（上・冬・霜・三七〇、『菅家文草』巻四・三〇四）

(20) 聲々已斷華停鶴、歩々初驚葛屢人。　菅
（上・冬・霜・三七一、『菅家後集』四七二）

(21) 立二於庭上一頭爲レ鶴、坐在二爐邊一手不レ龜。　菅
（上・冬・雪・三七九、『菅家文草』巻四・二七六）

(22) 氷封二水面一聞無レ浪、雪點二林頭一見有レ花。　菅
（上・冬・氷附春氷・三八四、『菅家文草』巻一・二）

(23) 鹽牙米簸聲々脆、龍頷珠投顆々寒。　菅
（上・冬・霰・三九一、『菅家後集』四八九）

(24) 香自二禪心一無レ用レ火、花開二合掌一不レ因レ春。　菅
（上・冬・佛名・三九四、『菅家文草』巻四・二七九）

(25) 羅綺之爲二重衣一、妬二無レ情於機婦一。管絃之在二長曲一、怒二不レ関於伶人一。　〈春娃無氣力　菅〉

（下・管弦・四六六、『菅家文草』巻二・一四八〈序〉）

(26) 落梅曲舊脣吹レ雪、折柳聲新手掬レ煙。　同
（下・管弦・四六七、『菅家文草』巻六・四三四）

(27) 閑居屬二於誰人一、紫宸殿之本主也。秋水見二於何處一、朱雀院之新家也。　〈閑居樂秋水　菅〉
（下・水附漁夫・五一五、『菅家文草』巻六・四四三〈序〉）

(28) 垂釣者不レ得レ魚、暗思二浮遊之有一レ意。移レ棹者唯聞レ雁遙感二旅宿之隨一レ時。　同
（下・水附漁夫・五一六、『菅家文草』巻六・四四三〈序〉）

(29) 老鶴從來仙洞駕、寒雲在昔妓樓衣。　菅
（下・故宮附破宅・五三三、『菅家文草』巻五・三五八）

(30) 人如二鳥路一穿レ雲出、地是龍門趁レ水登。　菅
（下・山寺・五八二、『菅家文草』巻五・三七四）

(31) 都府樓纔看二瓦色一、觀音寺只聽二鐘聲。〈不レ出レ門　菅〉
（下・閑居・六二〇、『菅家後集』四七八）

(32) 欲下以二浮生一期二後會上、還悲二石火向レ風敲一。　菅
（下・餞別・六三七、『菅家文草』巻五・四二二）

(33) 己酉年終冬日少、庚申夜半曉光遲。　菅

（下・庚申・六五一、『菅家文草』巻四・三一八）

(34) 秋夜待レ月、纔望二出レ山之清光一。夏日思レ蓮、初見二穿レ水之紅艶一。　〈催粧序　菅〉

（下・妓女・七一〇、『菅家文草』巻五・三六五〈序〉）

(35) 算取宮人才色兼、粧樓未レ下詔來添。　菅

（下・妓女・七一一、『菅家文草』巻五・三六五）

(36) 雙鬟且理春雲軟、片黛纔生曉月纖。

（下・妓女・七一二、『菅家文草』巻五・三六五）

(37) 羅袖不レ違レ廻二火熨一、鳳釵還悔鏁二香奩一。

（下・妓女・七一三、『菅家文草』巻五・三六五）

(38) 和風先導蕉煙出、珍重紅房透二翠簾一。

（下・妓女・七一四、『菅家文草』巻五・三六五）

（本学助教授）